

<研究ノート>

ローマ期の観光案内人とプルタルコス「ピュティアの神託について」 前半における案内人（ペリエーゲーテース）の役割

山口 京一郎

I. はじめに

プルタルコス「ピュティアは今日では詩のかたちで神託を降ろさないことについて」（『モラリア』394d-409d、以下、「ピュティアの神託について」と略す）は、1世紀末-2世紀初頭頃の、デルポイのアポロン神域を観光しながらの議論を描いた対話編である。ペルガモンからの客人（ディオゲニアノス）との、神域を案内し奉納物を見て回りながら行った議論の様子を、案内を終えたピリノスがバシロクレスへ報告するという形式をとっており、当時の観光の様子をうかがうことができる。ディオゲニアノスらの観光には「案内人」（περιηγητής：ペリエーゲーテース、先導者・案内人）たちが同行している。この案内人たちは「ピュティアの神託について」で展開される議論にはほとんど参加せず、奉納物の説明などを行うのだが、しばしば必要以上に話そうとするうえ、質問に答えられないこともある。彼らは「ピュティアの神託について」の作中でどのような役割を果たしているのか。

本稿ではまずⅡにおいて、古代の〈観光〉について概観した後、古典古代の文献に残る〈観光案内人〉⁽¹⁾の記述を確認する。観光案内人としてのペリエーゲーテースらの記述からローマ期の案内人のイメージが探られる。

ついでⅢにおいて、「ピュティアの神託について」前半に登場する案内人たちについての記述を順を追って確認する。その過程で、「ピュティアの神託について」の案内人たちが他の文献に現れる案内人たちとそのイメージを共有する典型

的なキャラクターであることが示される。これと平行して、そのような典型的なイメージをまとった案内人たちの作中における位置づけもその都度指摘される。彼らは作品前半において話題の展開を部分的に担っており、また他の登場人物たち——とりわけディオゲニアノス——の性質描写を部分的に導いてもいる。いわば作品前半の話題展開と登場人物説明のための舞台装置であり、その舞台装置として機能するために「案内人」であるというキャラクターが活用されているといえよう。

II. 〈観光案内人〉：ἐξηγητής, περιηγητής, *mystagogus* (μυσταγωγός)

古代ギリシア・ローマ世界における〈旅行〉と旅先での〈観光〉⁽²⁾については、包括的研究としてはライオネル・カッソンの『古代の旅の物語』(1974年)⁽³⁾を皮切りにし、特に1990年代より研究が盛んになってきている⁽⁴⁾。しかしながら当地を訪れた者に対して土地・人物・建造物・絵画・彫刻・工芸品・碑等の説明を行う現地の案内人については、多くの場合、旅行と観光についての考察の中で付随的に触れられる⁽⁵⁾に留まってきた。そのような扱いに留まる要因としては、ひとつにはこれらの研究の対象が旅行と旅行者であり、それらのシステムや振る舞いの考察が主眼となっていることが考えられる。いまひとつには、案内人に関する史料が極めて少なく、案内人を対象とした研究が単独で成り立ち難いという事情がある。

案内人の分析を行った研究として、クリストファー・ジョーンズによるパウサニアス『ギリシア案内記』に現れる案内人(ἐξηγητής：エクセーゲーテース、解説者・釈義者)に関しての集中的な研究が挙げられる⁽⁶⁾。ジョーンズはエクセーゲーテースを主な対象としつつも、情報源として言及される特定の呼称を与えられない人々(たとえば「アテナイの人びとによれば」(『ギリシア案内記』1.1.4)⁽⁷⁾のように紹介される者たち)や、パウサニアス以外の文献記述や碑文に現れるペリエーゲーテースとの比較を行い、パウサニアスがペリエーゲーテースという呼称を用いず専らエクセーゲーテースを用いるのは文体上の要請によるも

のであって、パウサニアスがエクセーゲーテースと呼ぶ案内人たちと同時期のペリエーゲーテースたちとの間に性質上の差異は認められないという重要な指摘を行った⁽⁸⁾。

この研究が描き出したエクセーゲーテース／ペリエーゲーテースの像は以下のようなものである。彼らは基本的には善意の人々で、熱心に知識を披露し、また知らないことがあればそれを隠そうとはしない⁽⁹⁾。碑文からは彼らが宗教儀式を指導・監督する姿も読み取れる⁽¹⁰⁾。ただし、その真偽に関わらず客が聞きたがることを話すような態度が風刺的に描かれることもある⁽¹¹⁾。案内の代価を受け取ることもある⁽¹²⁾。全体として彼らは当地の故由に通じた地元の名士であり、相手が学識豊かな場合には必ずしもそれを凌駕するわけではないが、教養ある人々に囲まれても面目を保てるような人々である⁽¹³⁾。その振る舞いが最も描かれているもののひとつが「ピュティアの神託について」だ⁽¹⁴⁾。

ジョーンズは観光案内人たちが概して当地の歴史に精通したある程度の教養ある人々であったことを示す。ただしルキアノスなどに「風刺的に」表れるとされているように、文献記述は案内人たちの“熱心な”素振りをししば描いている。その振る舞いには、「ピュティアの神託について」の案内人たちと共通するところがある。そこで、本稿ではジョーンズの成果に多くを負いつつも、文献記述に現れるペリエーゲーテースの記述を改めて検討し、案内人の振る舞いがどのように描かれているかを確認しよう。また、補足的に *mystagogus* (μυσταγωγός：ミュスタゴゴス、秘儀を執り行う神官、ローマ期に比喩的に「案内人」を意味する) も扱う。

観光案内人の熱心さは、案内をしようと旅行者に集まってくるさまに、またその解説が見る物一つ一つに付されるさまに現れる。

偽ルキアノス『エローテス』では登場人物のリュキノスが船でロドス島に到着後すぐに、宿を確保した足でディオニュソス神殿へ絵画を見に行く。

私はディオニュソスのストアを歩き、絵を一つずつ眺めていた。〔中略〕
 するとすぐに、小額の費用であらゆることについて案内してくれる2、3
 の人が私に群がってきた。 (偽ルキアノス『エローテス』8)⁽¹⁵⁾

リュキノスに集まってきた人々は絵画の解説・案内をしており (ἀφηγέομαι)、まさに観光案内人である。複数の人々がすぐに群がって来るところに、案内に対する貪欲ともいえる熱心さが表れている。ロミネはこの描写を引いて、好意的に、こうした状況なら観光客が簡単に案内人を見つけることができると評価する⁽¹⁶⁾。また「小額の費用で」(ὀλίγος διάφορος) されているように、旅行者から必要以上の対価を搾り取ろうとしているように描写されてはいない。絵画についてあらゆる情報 (πᾶς ἱστορία) を解説したのも、観光案内人の解説の典型的な仕方と思われる⁽¹⁷⁾。このようにリュキノスは案内人から細かな説明を受けたのであるが、ただしその全てが彼に必要な解説だったわけではない。いくらかは彼の好奇心を満たしたであろうが、解説の多くは彼の予想の内に留まったようである。

そのほとんどは私自身推察していたことだったのだが。

(偽ルキアノス『エローテス』8)⁽¹⁸⁾

ただしこの失望とも虚勢とも皮肉とも取れるリュキノスの言葉は同時に、観光案内人の解説内容が知識人の目から見ても妥当なものであることをも物語っている。

見る物一つ一つを説明する案内人は、ルキアノス『本当の話』にも現れる。主人公が冥界のとある島に着いた場面で、現地(冥界)の案内人(περιηγητής)たちが登場し、冥界にいる者たちについて事細かに語る。

そして案内人たちがひとりひとりの、それ故に罰を受けるに至った罪と生い立ちを伝えてくれた。 (ルキアノス『本当の話』2.31)⁽¹⁹⁾

ここでは冥界に収監されている者たちひとりひとりについて、あたかも聖域の観光案内人が奉納物ひとつひとつについてその来歴を語るかのように、冥界の案内人たちが説明をしている。このようなパロディが成り立つのも、現実世界の案内人のイメージが共有されているからであろう。

旅行者を案内をしようとする熱心さは、ときとして煩わしいものにも感じられよう。ウァロ『メニッポス風風刺詩』には、おそらくそのように集まってきたり盛んに説明をしたりしようとする案内人（mystagogus）たちへの風刺的な苦情が詠われている。

オリュンピアのユピテルが、アテナイのミネルウァが、ご自身の案内人たちから私を守ってくださいよう。

（ウァロ『メニッポス風風刺詩』断片34）⁽²⁰⁾

案内人を指してギリシア語由来のラテン語として使われる語 *mystagogus* の本義は神官である。オリュンピアはユピテル（ゼウス）の、アテナイはミネルウァ（アテナ）の地であり、それぞれの司る地でその神官／案内人から旅行者である自分を守ってくれと訴える。つまり、煩わされたくないという訴えであろう。

また、案内人の熱心さはときとして旅行者への過剰なサービス、すなわち旅行者が聞きたがることを語るといふ態度へしばしば繋がる。ルキアノス『嘘好き』では、詩人の神話語りや当地の都市の起源譚などが必ずしも事実を語っていないことが指摘される。ただしそれは、ピロクレスによる、“許される嘘”として擁護する文脈での発言である。

いずれにせよもしもこれら伝説語りをギリシアから排除してしまったら、当地の案内人たちが餓えて全滅させられることは免れない、無料でさえ外国人たちは本当のことを聞くことを望みはしないのだから。

（ルキアノス『嘘好き』4）⁽²¹⁾

外国人／旅行者（ξένος）たちは事実を知りたいのではない。おそらく興味を掻き立てるような、当地についてのイメージどおりの話を聞きたいのであろうか。したがってそれに合わせた話を案内人（περιηγητής）たちは語るなのであって、それを責めることはできないという。案内における観光客の需要と事実との間のジレンマが表れている指摘である。案内人の言は旅行者の需要に左右され得るといふ一般的事情を反映しているのだろう。同様のことはパウサニアスも指摘している。

当のアルゴス人の案内人たちも自分たちが必ずしも全て真実に基づいて説明しているわけではないことに気づいていないではないが、変わらず同じ説明をしている。大勢の思い込みに反して考えを変えるよう説得するのは容易なことではない。（パウサニアス『ギリシア案内記』2.23.6）⁽²²⁾

アルゴス人たちはアルゴスにあるはずのないもの⁽²³⁾がアルゴスにあると主張しており、アルゴスの案内人（ἐξηγητής）たちはその主張をなぞった説明を続けている。ただし案内人たちはその主張が誤りであることを知っており、しかし真偽よりも人々の思い込みに適うことを優先している。そのことをパウサニアスは強く責めてはいないようである。むしろ同情的にも思われる。

ところで、案内人は通常、そこにあるものがなんであるかを解説する者だが、しばしばそこにかつてあったものについても語る。以下はキケロ『ウェレス弾劾』においてウェレスの仕業を批難する文脈での記述ではあるが、そこにはものを語る行為の存在を証言している。

それゆえ、審判人諸君、いつも客人を見るべきものところへ連れて行きひとつひとつ見せる（シュラクサエの）者たちは、——彼らがミュスタゴースと呼ぶ者たちだが——いまやその説明の仕方を逆転させてし

まった。かつてはどこになにがあるかを説明していたが、今ではどこからなにが奪い去られたのかを指し示しているのだ。

(キケロ『ウエレス弾劾』 2.4.132)⁽²⁴⁾

ウエレスによってシュラクサエから多数の品々が奪い去られた結果、当地の案内人（*mystagogus*）たちは客人／旅行者（*hospes*）に見せるべきものを見せられなくなってしまった。仕方なく、今はないものについての説明を行っている。これは法廷弁論において被告人のごく最近の暴虐を描き出すため論述であり、いわば特異な例ではある。しかし後述するように「ピュティアの神託について」にもかつてあった（が今はない）ものについて語る案内人が登場するため、程度の差こそあれ、そこにないものを語る行為はしばしば見られたと推測される。ところで、引用箇所直前に述べられている奪い去られたものの事例は、デルポイの三脚卓、青銅の混酒器（いずれも複数）、大量のコリントス製の什器類といった工芸品である（『ウエレス弾劾』 2.4.131）。これらは一般的に案内人が説明するもの、したがって観光客が見るものの一例と見なせよう。

以上の案内人についての文献記述から、改めてそのイメージをまとめれば次のようになろう。案内人は熱心な人々で、観光客を見ればすぐに集まってきて安価で案内を行う。その案内はひとつひとつを細かく説明するような詳細なものである。説明の対象となるのは絵画・彫刻・工芸品などで、またその来歴や市の歴史と絡めて説明される。しばしば観光客の需要に合わせて虚偽の説明を行うこともあるし、そこにないもの（かつてあったもの）を説明することもある。また知識ある聞き手には新規な情報でない場合がある。

III. 「ピュティアの神託について」における案内人たち

はじめに述べたとおり、「ピュティアの神託について」は観光をしながらの議論を描いた対話編である。ペルガモンからの若き客人ディオゲニアノスを案内し

終えたピリノスに、バシロクレスが議論の報告を請う場面から始まる。彼らはデルポイのアポロン神域の奉納物 (ἀνάθημα) を見てきたのであった (394e)⁽²⁵⁾。

ここでは神域を観光する一行に同行する案内人たちの言動が前項で述べた観光案内人のイメージに沿うものであり、またそのイメージに基づく形で作中の話題を展開させる役割を担っていることを指摘する。

ところで、作品冒頭の会話からは精力的な観光がうかがわれる。一行は夕方までアポロン神域を観光していた (394d)⁽³⁶⁾。そして帰ってきた今、バシロクレスへ報告できるのはピリノスしかない。ピリノスが言うには一行の他の面々のほとんどはピリノスと別れ、その足でコリュキオンの洞窟とリュコレイアの方へ向かったからである (394f)。コリュキオンの洞窟 (パーンの洞窟) はアポロン神域背後のパイドリアデスの急峻な斜面を上った先のパルナッソス山中にあり、直線でも4kmほど離れている。実際の道のりは10kmほどとされる⁽²⁷⁾。夕刻からさらに山を登り始めることには一行の観光意欲の強さを感じる。

さて、客人であるディオゲニアノスは見物好き (φιλοθεάμων)、議論好き (φιλήκοος)、学問好き (φιλόλογος)、学び好き (φιλομαθής) である (394f)。さらに論争をすると同時に質問も投げかけ、苦情な物言いをすることもない知性の持ち主と褒められる (395a)。そのようなディオゲニアノスの特性は、案内人 (περιηγητής) たちとのやりとりと関連しても描き出されることとなる。

報告を始めるにあたり、ピリノスは同行した案内人の態度を次のように述べる。

案内人たちはあらかじめ準備していた解説を完遂しようとした。説明語
りも碑文の大部分も省略されたいという我々に少しも注意を払わずに。

(395a)⁽²⁸⁾

ここにはひとつひとつを熱心に説明するという案内人の性質が見事に表れている。報告冒頭において、一行に同行した案内人が典型的な案内人であることが示



図1：アポロン神域背後の斜面の現在の道。急斜面を九十九折れに道が通っている。筆者撮影（2014年9月21日）。



図2：コリュキオンの洞窟へ至る現在の道。なお写っているのは徒歩での道だが、写真奥（デルポイとは反対方向）にはなんとか車が通れるほどの道がある。筆者撮影（同日）。



図3：コリュキオンの洞窟。筆者撮影（同日）。

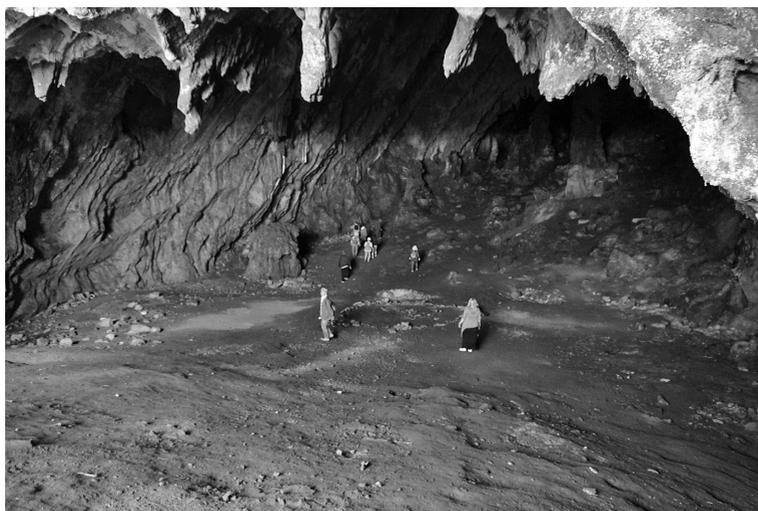


図4：コリュキオンの洞窟内部。筆者撮影（同日）。

されている。だがこのピリノスの不満ともとれる案内人の描写に続いて、ディオゲニアノスがそれ以上に熱っぽく語る様が描かれる。ディオゲニアノスは〈海軍将校たちの青銅群像〉についてその色彩に注目し、製法についての見識を披露する（395b-c）。その細部への視点と見識により、彼の美術作品に対する眼はピリノスの認めるところとなる（395a-b）。さらにテオンが口を挟み（395c-d）、ディオゲニアノスの質問にテオンが答えディオゲニアノスは同意する（395d-e）。両者の議論は396cまで続く。もはや案内人に説明を省略させようとしたのが徒勞に思われるほど、ひとつの群像作品について語られる。ただしその内容は作品そのものについての来歴などの話題ではなく、作品に触発された議論である。この最初の、鑄造についての議論において、先に述べられたディオゲニアノスの特質——議論を好み質問も投げかける知性溢れる好人物——が確認される。また403aから「ピュティアの神託について」の最後（409d）までひとりで語るテオンの学識ある年長者としての特性も表れている。

議論が終わったところで次の議論へと場面を繋ぐのが案内人の描写である。

これに続いて沈黙が生まれ、ふたたび案内人たちが話し始めた。(396c)⁽²⁹⁾

そして案内人たちがある神託を紹介したとき、ディオゲニアノスが神託の詩句についての疑問をはさむ（396c-d）。これをきっかけとしてサラピオンとポエトスを交えた議論が始まる（396c-397d）。これらふたつの議論の間にはある程度の時間が経っていると思われるが、案内人たちに触れることで速やかに場面を転換させている。その案内人の描写も、沈黙を捉えて説明をし始めるという形で、説明に熱心な案内人のイメージに沿ったものである。また、次の議論へ向けてディオゲニアノスの興味を喚起するのも案内人の提供した話題である。この神託についての議論は「ピュティアの神託について」後半の主たる議論を導くものであり、重要な前段である。

この神託についての議論でディオゲニアノスは誠実に結論を求めるのだが

(397d)、テオンが案内人を引き合いに出してさえぎるという形で一旦区切られる。

そのときテオンが話題を引き取って「だが今は」と言った。「若者よ、我々は意地悪くも案内人たちの職分を奪ってしまっているかのようだ。ともかくもまず先に彼らに仕事をさせてやり、次にゆっくりと疑問を提起したまえ」。

(397d-e)⁽³⁰⁾

熱心に説明をしようとする案内人に対して、ディオゲニアノスの方がさらに熱心に話が止まらなくなってしまうかのようである。そしてテオンの提案は、先に案内人たちが沈黙を捉えて説明を再開した(396c)のをなぞるように、今度は案内人に仕事をさせてから議論を再開しようというものだ。その提案は案内人の仕事に配慮しているようでありながら、同時に案内人のような熱心な語りを一行も行っていることを示唆している。このテオンの提案のとき一行は〈ヒエロン像〉のところに来ており、その像についての説明（作中では語られない）についてディオゲニアノスはその内容が既知のものであっても聞き手に徹する。

〔〈ヒエロン像〉についての〕他の説明の全てを知っていた客人〔ディオゲニアノス〕は、それにもかかわらず気立てのよさから自らをして聞き手としていたのだが。

(397e)⁽³¹⁾

『エローテス』のリュキノスのときと似て、案内人の説明内容がディオゲニアノスの知識の内に留まっている間も、彼はその説明に不満なそぶりは見せない。この描写は、一方ではディオゲニアノスの苦情を言わない性質と同時に彼がテオンの言いつけを誠実に守っていることを物語っており、他方では案内人の説明がディオゲニアノスの知識に適ったものであったことも示している。だが、案内人が〈ヒエロン像〉の台座がヒエロンの死の日に倒れたという逸話を語るとディオゲニアノスは素直に驚く(397e)。この驚きをきっかけとして登場人物たちによ

る議論が再会される。ピリノスに関連する様々な話を披露しさらにポエトスとサラピオンが加わる（397e399e）。この〈ヒエロン像〉でのやりとりにおいて案内人は、ディオゲニアノスの性質の描写に用いられながら、彼の驚きを引き出すことで次の議論へと話題を導く役割も担っている。

ディオゲニアノスの驚きに始まるみつつめの議論は〈コリントス人たちの宝物庫〉の描写で途切れ、ここでは案内人を交えずに再度ディオゲニアノスの驚きによって話題が変わり、サラピオンとピリノスが語る（399e-400d）。そしてサラピオンが案内人たちへ、宝物庫の名が奉納者キュプセロスの名ではなく〈コリントス人たち〉の名で呼ばれているのはなぜかを問うが、答えられず（400d）、その質問についてのピリノスの語りが続く（400d-f）。ここでは案内人は場面転換を担っているとまではいえませんが、ピリノスの語りを自然に導入している。また、案内人といえども話題によっては答えられないことがあることがうかがわれる。

続いて一行が〈アカントス人たちとブラシダスの宝物庫〉へ差し掛かったとき、案内人の説明がまたもディオゲニアノスの注意を引く。

案内人が我々に、そこにかつてヘタイラのロドピスの鉄の焼き串が置いてあった場所を指し示した。
(400f)⁽³²⁾

ここでは案内人のひとりが、『ウェレス弾劾』でのミュスタゴゴスたちがそうしていたように、かつてあったが今はないものを指し示している。ただしここではロドピスの串そのものがそこに置かれていないことは問題にされない。ディオゲニアノスはそれが邪な稼ぎによる奉納であることに憤慨する（400f-401a）。だが彼の潔癖ともいえる憤りは、サラピオンとテオンにたしなめられる（401a-402b）。サラピオンが例示した〈ムネサレテの黄金像〉についてテオンが語り終えたとき、案内人のもうひとりがクロイソスによる〈パン焼き女の黄金像〉を紹介する（401e）。この像はテオンによって好例として活用される（401e-402b）。話題に合わせてデルポイにある奉納像を即座に紹介する、当地の案内人として面

目躍如的な活躍である。案内人たちは彼らの説明に専念し一行の議論に加わらなかったのでは決してなく、一行の議論の中に彼らの提供できる話題があれば——あるいはその隙を狙って——当地の適切な例を提出することができた。

テオンの語りがひと段落すると、発言しようとするサラピオンを遮ってディオゲニアノスがピュティアの神託に話を戻す（402b-c）。そこで一行は残りの観光は別の機会に譲り、アポロン神殿の南側に腰を下ろして「ピュティアの神託について」の本題の議論を開始する（402b-c）。以降、案内人たちは登場しない。

IV. まとめ

ローマ期の観光案内人についての証言からは次のことが言えよう。案内人はローマ期において、ステレオタイプのイメージが成立するほどに、一般的な存在である。そのステレオタイプとは、案内人の熱心さに基づいた、「旅行者に集まってくる」「話が止まらずひとつひとつのものについて語る」「語る内容は聞き手の知識の範囲内に留まる」「しばしば事実と異なることをそれと知って語る」といったものだ。このようなイメージは主に二つの点に起因すると思われる。ひとつには、彼らは実際に郷土のことに通じており、それを善意で熱心に語る人々であり、その熱意がしばしば過剰さに結びついたためである。いまひとつには、証言を残しているのが知識階級の人々であり、彼らの教養にとっては案内人の語る内容は不十分であるか少なくとも真新しいものではない場合があったためである。このことはしかし、観光案内人の主なターゲットとなる旅行者は、彼ら知識階級ではなく、より庶民的な広い層であったことをうかがわせる。「ピュティアの神託について」で碑文をいちいち読上げる案内人の態度は文字（あるいは碑文の特殊な書法）を読めない人々が通常の旅行者であることを物語っているし、パウサニアスやルキアノスに現れる虚偽の解説も、厳密な事実よりも「聞きたいイメージ」を大事にする人々の存在をうかがわせる。すなわち以上のことは、ローマ期において、文献に直接現れる以上に旅行者の裾野が広大に広がっていたことを証している。そして文献に報告する者たちのしばしば案内人を鬱陶しがらる証言

の裏返しとして、より広い層の旅行者にとっては観光地に着くや集まってきて事細かに説明をしてくれる案内人は、彼らの需要に適うありがたい存在であったことが示唆される。

「ピュティアの神託について」の前半はこのような案内人のイメージに沿った案内人たちを登場人物とすることで、筋の展開と主要な登場人物——とりわけディオゲニアノス——の特徴を描くのに活用しているといえる。議論と議論の合間の時間の流れを案内人たちの説明というひとことで埋めることで簡潔に示され、その説明内容が次の議論のきっかけとなり、あるいは議論に使える例を提出しさえする。さらに案内人の説明についてディオゲニアノスが満足し、質問を提出し、驚き、憤慨し、また案内人の仕事を妨げるほどに議論に熱中することで、人柄が良く教養があり議論を好む若者という彼のキャラクターが描き出される。同時にそれを相手にする中で特にテオンの年長者としての落ち着きと学識も描かれている。「ピュティアの神託について」に登場する案内人たちは無名の端役ではあるが、その無名の「案内人」であることによって、作品の展開と人物描写のための舞台装置としての役割を与えられた不可欠の登場人物である。

注

- (1) 本稿では案内を行うローマ期の ἐξηγητής, περιηγητής, *mystagogus* (μυσταγωγός) たちを総称として〈観光案内人〉あるいは単に〈案内人〉と呼ぶ。彼らの解説対象が主に神域内の文物であるにも関わらず〈観光〉を冠するのは、そこに向けられる旅行者の眼差しや案内人による解説内容が必ずしも宗教的なものに限られず、旅先での好奇心・知識欲を満たすものが含まれると思われるためである。そのような好奇的な動機付けは、たとえば偽ウエルギリウス『アエトナ』II.568-599に、神殿・神話の舞台・古戦場・絵画・彫刻などを見ねばと人々は危険を犯して旅に出る（近くにあエトナ火山という自然の驚異があるのに）と詠われる皮肉が鮮やかに描き出している。
- (2) 本稿では〈旅行〉（および〈旅〉）という語を、公務・商業等あるいは神託伺い、詣で、療養、祭礼・競技への参加・見物、遊学等で日常の生活地を離れた場所へ赴くこと、という程度のゆるやかな意味合いで用いている。また〈観光〉については、旅先で現地の文物を見聞することという程度の意味合いで、旅先での行動に限って

用いている。古典古代に〈観光〉と呼べるものが存在したか否かは観光学・観光史において議論の分かれるところである（なお、観光学における〈観光〉は通常、〈近代〉の文脈の中に置かれていることはいうまでもない）。そもそも旅行や観光については現代社会の事象に対しても多様な事例に広く妥当する定義が示されているとはいえず、その定義がどこまで古代社会の事象に適用できるのが争点である。この点について近年の議論の概要については Rabotić (2014) を参照されたい。したがって当然ながら西洋古典学においても旅と見聞の問題を巡って用語と定義上の困難が克服されているとはいえない。いくつかの基本的な用語（〈観光〉や〈旅行〉といった）を便宜上の定義で用いざるを得ないのが現状である。本稿はこれらの定義についての議論に踏み入ることはしないが、観光学上の観光・旅行 (tourism) の定義については Urry and Larsen (2011) pp.4-5（アーリ (1995) pp.4-6）；飯田 (2012) pp.1-24, 246f を、古代における pilgrimage（巡礼・巡歴行脚）については Elsner and Rutherford (2005); Williamson (2005) pp.220-223, 238-240 を、θεωρία（テオーリア、派遣・祭礼見届けの旅）については Elsner and Rutherford (2005); Nightingale (2005) を参照されたい。観光的なるものが古典古代の社会に存在したこと自体には議論の余地がないように思われる。本稿の関心はどのような言葉で切り取るかではなく、どのような営みがあったかを記述することである。

- (3) Casson (1974) (カッソン (1998)) .
- (4) タウナーによる観光史の方法論的紹介 (Towner (1998)) から観光史研究が本格化したとあってよいだろう。
- (5) たとえば Casson (1974) pp.264ff (カッソン (1998) pp.276ff) や Lomine (2005) pp.82-83 など。
- (6) Jones (2001).
- (7) 以下、古典作品の引用については参考文献欄に挙げる邦訳を参考にしつつ、必要に応じて改変している。
- (8) Ibid.
- (9) Ibid., p.38.
- (10) Ibid., p.37.
- (11) Ibid., p.38.
- (12) Ibid., pp.37-38.
- (13) Ibid., pp.36-39.
- (14) Ibid., p.37.
- (15) “ἐκπεριῶν δὲ τὰς ἐν τῷ Διονυσίῳ στοὰς ἐκάστην γραφὴν κατώπτευν [...]. εὐθὺ γὰρ μοι δὺ' ἢ τρεῖς προσερρύθησαν ὀλίγου διαφόρου πᾶσαν ἱστορίαν ἀφηγούμενοι.”
- (16) Lomine (2005) p.82.
- (17) 大フィロストラトス『エイコネス』の「序」に、名のある画家やその作品を集めた

都市や王たちについては各所で述べられているがここでは画家とその周辺の情報（ιστορία）については述べない、という宣言がある（proem.3）。これは一般的な観光案内人ではなく第二ソフィスト期の競合者・競合作品を意識しての記述と思われるものの、絵画を説明するにあたって作品の来歴について述べるという行為が広く行われていたことを示している。

- (18) “τὰ δὲ πολλὰ καὶ αὐτὸς εἰκασίᾳ προῦλάμβανον.”
- (19) “προσετίθεσαν δὲ οἱ περιηγηταὶ καὶ τοὺς ἐκάστων βίους καὶ τὰς ἀμαρτίας ἐφ’ αἷς κολάζονται.”
- (20) “et me Iuppiter Olympiae, Minerua Athenis suis mystagogis uindicassent.”
- (21) “εἰ γοῦν τις ἀφέλοι τὰ μυθώδη ταῦτα ἐκ τῆς Ἑλλάδος, οὐδὲν ἂν κωλύσειε λιμῶ τοὺς περιηγητὰς αὐτῶν διαφθαρῆναι μηδὲ ἀμισθὶ τῶν ξένων τάληθες ἀκούειν ἐθειησάντων.”
- (22) “οὐ μὴν οὐδὲ αὐτῶν λέληθεν Αργείων τοὺς ἐξηγητὰς ὅτι μὴ πάντα ἐπ’ ἀληθείᾳ λέγεται σφισι, λέγουσι δὲ ὅμως· οὐ γάρ τι ἔτοιμον μεταπεισοῖα τοὺς πολλοὺς ἐναντία ὧν δοξάζουσιν.”
- (23) デイアネイラの墓・ヘレノスの墓・パラディオン（オデュッセウスとディオメデスがトロイアから持ち出したアテナ女神像）。いずれも当然の如くアルゴスにあるはずのないものであるとパウサニアスは指摘する（『ギリシア案内記』2.23.5-6）。
- (24) “Itaque, iudices, ii qui hospites ad ea quae visenda sunt solent ducere et unum quidque ostendere,—quos illi mystagogos vocant,—conversam iam habent demonstrationem suam. Nam ut ante demonstrabant quid ubique esset, item nunc quid undique ablatum sit ostendunt.”
- (25) 以下、「ピュティアの神託について」の箇所を示す際に作品名を略す。
- (26) ただし夕暮れまでかかってしまった理由は、見物だけでなく、歩きながらの議論が白熱したためでもある（394e）。また、神域の全てを見物したわけではなく、アポロン神殿までたどりついたあたりで、「ピュティアの神託について」の主題であるピュティアの神託についての議論を腰を落ち着けて行うために、残りとは別の機会にということにして観光をいったん切り上げる（402b-c）。
- (27) 大西（2001）p.175 n.2。なお、筆者がコリュキオンの洞窟側からアポロン神域を訪れた際は、アポロン神域の直上（パイドリアドスの上側）から神域に徒歩で降るのにゆっくりとした歩みで小一時間を要した。パイドリアドスの上からコリュキオンまでも10km 足らず離れていると思われる。
- (28) “ἐπέβαινον οἱ περιηγηταὶ τὰ συντεταγμένα, μηδὲν ἡμῶν φροντίσαντες δεηθέντων ἐπιτεμεῖν τὰς ῥήσεις καὶ τὰ πολλὰ τῶν ἐπιγραμμάτων.”
- (29) “ἐκ τούτου γενομένης σιωπῆς, πάλιν οἱ περιηγηταὶ προεχειρίζοντο τὰς ῥήσεις.”
- (30) “ὑπολαβῶν οὖν ὁ Θέων, “ἀλλὰ καὶ νῦν,” εἶπεν, “ὦ παῖ, δοκοῦμεν ἐπιρραία τινὶ τοὺς περιηγητὰς ἀφαιρεῖσθαι τὸ οἰκείον ἔργον. ἔασον οὖν γενέσθαι τὸ τούτου πρότερον, εἶτα περὶ ὧν βούλει καθ’ ἡσυχίαν διαπορήσεις.””

- (31) “καὶ τῶν μὲν ἄλλων ὁ ξένος εἰδῶς ἅπαντα παρῆχεν ὁμῶς ὑπ’ εὐκολίας ἀκροατὴν αὐτόν”
- (32) “ἡμῖν ἔδειξεν ὁ περιηγητὴς χωρίον, ἐν ᾧ Ῥοδώπιδος ἔκειντο ποτε τῆς ἑταίρας ὀβελίσκοι σιδηροί.”

* 本稿は科学研究費補助金（研究課題番号：24652040）の助成による研究成果の一部である。

参考文献

- 飯田芳也（2012）『観光文化学——旅から観光へ』古今書院。
- 大西英文（訳）（2001）「第四演説——彫像について」『ウェッレース弾劾Ⅱ（キケロー選集5 法廷・政治弁論）』岩波書店。
- 呉茂一（訳）（1961）「本当の話」『古代文学集（世界文学大系64）』筑摩書房。
- 高津春繁（訳）（1951）「嘘好き、または懷疑者」『ギリシア・ローマ物語・喜劇篇 黄金の驢馬他（世界文学全集古典編2）』河出書房。
- 馬場恵二（訳）（1991-1992）『ギリシア案内記（上・下）』岩波書店。
- Astbury, Raymond, (1985), *M. Terentii Varronis Saturarum Menippearum Fragmenta* (Bibliotheca Scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana), Leipzig: BSB B.G Teubner Verlagsgesellschaft.
- Casson, Lionel, (1974), *Travel in the Ancient World*, Toronto: Hakkert (ライオネル・カッソン (著)、田畑賀世子、野中春菜 (訳) (1998) 『古代の旅の物語』原書房) .
- Duff, J. Wight and Duff, Arnold M., (1982), *Minor Latin Poets* (Loeb Classical Library) (edition bound in two volumes, 1st edn. in 1934), Cambridge, Mass: Harvard U. P.
- Elsner, Jaś and Rutherford, Ian, (2005), “Introduction,” in J. Elsner and I. Rutherford (eds.), pp.1-38.
- Elsner, Jaś and Rutherford, Ian (eds.), (2005), *Pilgrimage in Graeco-Roman & Early Christian Antiquity: Seeing the Gods*, Oxford: Oxford U. P.
- Fairbanks, Arthur, (1931), *Philostratus: Imagines* (Loeb Classical Library), Cambridge, MA and London: Harvard U. P.
- Goodyear, F. R. D., (1966), “Aetna,” in W. V. Clausen, F. R. D. Goodyear, E. J. Kenney and J. A. Richmond (eds.), *Appendix Vergiliana* (Recognoverunt et Adnotatione Critica Instruxerunt, Scriptorum Classicorum Bibliotheca Oxoniensis), Oxonii: e Typographeo Clarendoniano.
- Harmon, A. M., (1913, 1921), *Lucian*, vol.1, 3 (Loeb Classical Library), London: William Heinemann and New York: Macmillan.

- Jones, Christopher P., (2001), "Pausanias and his Guides," in Susan Alcock and Jaś Elsner, *Pausanias: Travel and Imagination in Roman Greece*, Oxford: Oxford U. P., pp.33-39.
- Kalinka, Ernst and Schönberger, Otto (eds.), (2004), *Philostratos: Die Bilder*² (1st edn. in 1968, München: Ernst Heimeran Verlag), Würzburg: Königshausen & Neumann.
- Lomine, L., (2005), "Tourism in Augustan Society (44BC-AD69)," in J. K. Waldton (ed.), *Histories of Tourism: Representation, Identity and Conflict*, Clevedon: Channel View Publications, pp.71-87.
- Macleod, M. D., (1967), *Lucian*, vol.8 (Loeb Classical Library), Cambridge, Mass.: Harvard U. P. and London: William Heinemann.
- Nightingale, Andrea Wilson, (2005), "The Philosopher at the Festival: Plato's Transformation of Traditional *Theōria*," in Elsner and Rutherford (eds.), pp.151-180.
- Peterson, William, (1917), *M. Tulli Ciceronis Orationes: Divinatio in Q. Caecilium*, In C. Verrem (Scriptorum Classicorum Bibliotheca Oxoniensis), Oxonii: e Typographeo Clarendoniano.
- Rabotić, Branislav, (2014), "Special-Purpose Travel in Ancient Times: "Tourism" before Tourism?," in M. Skakun (ed.), *Proceedings Book of the 2nd Belgrade International Tourism Conference (BITCO 2014): Thematic Tourism in a Global Environment: Advantages, Challenges and Future Developments*, Belgrade: College of Tourism, pp.99-114.
- Rocha-Pereira, Maria Helena, (1989), *Pausaniae graeciae descriptio*, vol.1² (Bibliotheca Scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana) (1st edn. in 1973), Leipzig: BSB B. G. Teubner.
- Towner, John, (1988), "Approaches to Tourism History," in *Annals of Tourism Research*, 15, pp.47-62.
- Urry, John and Larsen, Jonas, (2011), *The Tourist Gaze 3.0* (1st edn. titled *The Tourist Gaze* by J. Urry in 1990), London: Sage (ジョン・アーリー (著)、加太宏邦 (訳) (1995)『観光のまなざし——現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局) .
- Williamson, George, (2005), "Mucianus and a Touch of the Miraculous: Pilgrimage and Tourism in Roman Asia Minor," in J. Elsner and I. Rutherford (eds.), pp.219-252.